

型堅果のみ、01冬はすべて凶作の最悪年、02冬は中型堅果ブナが豊作、03冬はすべてが豊作の最良年となった。このように短期間でも結実に大きな年次変動があり、しかもその組み合わせがさまざまであった。このような越冬時の食物供給の違いはサルの採食やそれに関連した行動圏利用、さらには死亡率などにも影響を与える可能性がある。

自由5

ニホンザル新生児における匂い刺激によるストレス緩和効果

川上清文（聖心女子大・心理）

筆者らは、ニホンザル新生児が採血を受ける場面に、ホワイトノイズという音刺激やラベンダーの匂いを呈示するとストレスが緩和されることを明らかにした(Kawakami, Tomonaga & Suzuki, *Primates*, 2002, 43, 73-85)。本研究では、その知見をさらに深めるために、サルの好物であるリンゴの匂いを呈示してみた。本年度は、3頭のみの実験であり、さらに頭数を増やす予定である。

本年度の3頭は、メス1・オス2で、第1回目の実験日が平均生後8.7日（平均体重543.3g）、第2回目の実験日が15.0日（体重580.0g）であった。1回目か2回目に、匂いを呈示し、呈示しない条件と比べた。行動評定の結果では、リンゴの匂いの呈示効果はみられなかった。今後、コレチゾルの分析結果を含めて、検討したい。

なお、リンゴの匂いは、以前のラベンダーの匂いと同様、高砂香料で合成されたものである。

自由6

チンパンジー幼児・ニホンザル幼児におけるカテゴリ化能力の発達の研究

村井千寿子（京都大・院・文）

2-3歳のチンパンジー乳児における、自発的な「動物」カテゴリの形成に関する実験的調査を行った。実験には、被験体の対象に対する接触を伴う注視時間を指標とした馴化法を用い、被験体の訓練は一切行わなかった。また、哺乳類、鳥、昆虫、爬虫類の4種のカテゴリからの模型を刺激として用いた。あるカテゴリに属する4つの対象を、ひとつずつ連続して呈示された場合（例：哺乳類であればゾウ、ウマ、イヌ、ウシなど）、被験体がそれらの共通性を認識し、同じカテゴリの成員としてグループ化したならば、刺激対象の呈示回数が進むにつれて、被験体の反応時間が減少すると予想される。一方、呈示された刺激を同じカテゴリの対象として認識しないのであれば、そのような反応時間の減少（馴化）は起こらないと考えられる。実験の結果、チンパンジー乳児が、上述の4種のカテゴリからの対象をグループ化することが示唆された。さらに、被験体がこれら4種のカテゴリを、より包括的なカテゴリである「動物カテゴリ」としてグループ化するかについても同様の方法によって調べたが、その証拠は得られなかった。今回の結果は、チンパンジー乳児が、上位レベルのカテゴリを自発的に形成するという新しい発見を示唆する。

自由7

ニホンザルにおける簡易物理的防護法の効果及び各種農作物に対する嗜好性

山中成元、常喜弘充、鋒山和幸（滋賀県農業総合センター・農業試験場・湖北分場）

ニホンザルによる農作物被害対策の一環として、当試験場で試作した簡易防護柵等による侵入防止効果を検討するとともに、昨年に引き続き食害を受けにくい農作物を選定する基礎資料を得るため、各種農作物に対する年齢別、採食経験別の嗜好性を検討した。簡易防護柵の侵入防止効果は、侵入試行回